

令和2年3月6日

令和元年度国立大学図書館協会海外派遣事業（短期）参加報告書

北海道大学附属図書館
佐藤亜紀

1. 派遣期間

令和元年8月31日（日）～9月8日（日）

2. 訪問先/対応者

シドニー大学図書館	Mr. Ryan Stoker (Research Data Officer) Ms. Piyachat Ratana (Research Data Officer)
ニューサウスウェールズ大学	Mr. Jake Surman (Senior Research Support Officer) Dr. Maude Frances (Associate Director, Scholarly) Dr. Adrian W. Chew (Data Management Training Consultant)
メルボルン大学図書館	Dr. Lyle Winton (Manager Digital Scholarship / SCIP Research Platform) Mr. Peter Neish (Research Data Curator)
モナシュ大学図書館	Mr. David Groenewegen (Director, Research)

3. 調査テーマ

オーストラリアの大学図書館におけるオープンサイエンス・研究データ管理の先行事例調査

4. 調査目的

近年、オープンサイエンスの推進や研究公正といった観点から日本においても研究データの管理や公開の重要性が高まってきている。また、一部の助成金においては、研究データ管理計画提出の義務化、研究後のデータや研究成果の公開を推奨するようになった。

海外事例として、ケンブリッジ大学、バージニア大学など欧米の大学図書館はいくつか報告されているが、国内で報告されたオーストラリアの事例は少ない。しかし、オーストラリアの大学図書館でも研究データ管理システムの運用、研究データの公開や広報といった日常的な支援を行っており、実際に訪問し調査することとした。

5. 調査結果

① シドニー大学図書館

シドニー大学は160年以上の歴史を持ち、10のキャンパス、約61,000人の学生と約8,000人の教職員を擁する研究大学である。

研究者自身が研究データを管理するため、Researcher Dashboard (DashR) というシステムを使用し、研究データ管理計画 (Research Data Management Plan : RDMP) の作成、研究データを保存するストレージのリクエスト受付等を行っている。

大学として研究データ管理ポリシー、研究データ管理手順を制定している。

研究データ管理のトレーニングとサポートは、図書館で担っているもの (データキュレーション、視覚化、公開など) と Sydney Informatics Hub (SIH) という全学的な研究施設が行っているもの (ストレージ、データベースアプリケーション、電子実験ノートなど) がある。

研究データ管理支援サービスは図書館、ICT 部門、デジタル部門が連携し行っており、ほかに Archives Preservation の担当もいるとのことである。

② ニューサウスウェールズ大学

同じくシドニーに位置しオーストラリアの優れた研究大学のひとつである、ニューサウスウェールズ大学には、約 62,000 人の学生と約 7,000 人の教職員が所属している。

ResData という研究データ管理システムを使用しており、システムから研究データ管理計画を登録することで、ストレージも使用することができる。そのため、研究データ管理計画の登録数とストレージの使用リクエスト数は、2017 年から 2019 年上半期の 2 年半の間に、研究者ではそれぞれ 5 倍以上、職員でも 2 倍から 3 倍の伸びとなったとのことである。また、ResData は公開可能な研究データをオーストラリアの研究データポータルサイトへアップロードする機能も有している。

研究を始めたばかりの研究者向けに、研究データ管理について学ぶことができる自習サイト Research Data Management Online Training (RDMoT) を提供するとともに、研究データ管理だけではなく、研究データを扱うためのアプリケーションや電子実験ノートなどについての研修会も年間 40 回行っている。

研究データ管理のサポート体制は、機関リポジトリを整備してきた図書館と情報基盤センターのような research technology 部門の協働により行っている。

③ メルボルン大学図書館

1853 年に設立されたメルボルン大学はビクトリア州の州都に位置し、学生数は約 53,000 人、教職員数は約 9,000 人である。

研究データ管理計画システムとして Digital Curation Centre の DMP online をカスタマイズして使用しており、将来的に他の研究支援システムと連携することを目指しているそうである。

研究データ管理について体系的に学ぶことができるトレーニングプログラム Managing Data @Melbourne は大学の学習管理システムから履修することができ、テキストデータは機関リポジトリにて公開されている (このプログラムはエディンバラ大学の研究データ管理トレーニングコース、マントラを元に作られたとのことである)。

研究データ管理に関するサービスは、図書館の研究部門の一部である Digital Scholarship Program で行っており、専門分野を持っている研究者が担当している。

④ モナシュ大学図書館

オーストラリアの偉人ジョン・モナシュにちなんで名づけられたモナシュ大学は、学生数が約 70,000 人、教職員数が約 9,000 人の研究大学である。

研究を始めようとしている大学院生や研究者に対して『研究データ管理計画チェックリスト』を使用するよう勧めている。チェックリストには、『データの著作権』、『倫理』、『データの種類』、『保存に関すること』など 8 項目 23 個の設問と 2007 年に策定されたオーストラリアの研究機関や研究者に求められる責任ある行動規範を示した The Australian Code for Responsible Conduct of Research（最新は 2018 年版）とモナシュ大学の研究データ管理ポリシーを参照することが記載されている。

情報基盤センターのような大学内機関と連携するほか、ラーニングスキルアドバイザーとも協働して研究者や学生とコミュニケーションを取るまたはアドバイスを行っているそうである。

⑤ 国としての取り組み

オーストラリアの国家的なデータインフラとして ARDC (Australian Research Data Commons) という取り組みがある。

- ・研究プラットフォームのクラウドサービス
- ・研究データポータル (Research Data Australia)
- ・DOI 等識別子の管理・作成

などを行っている。

また、ARDC は「月に一度、参加機関を回り情報交換をしており、共通の課題意識を持っている。」「パートナー機関とともにワーキンググループを作り、研修、スキルアップ等を図っている。」とのことで情報共有と人材育成面の活動もしている。

なお、ARDC は世界レベルの情報インフラを整備サポートするプロジェクト、National Collaborative Research Infrastructure Strategy (NCRIS) を通してオーストラリア政府から支援を受けている。

システムや細かなサービス内容の違いはあるが、各大学に共通していることは、研究データ管理を支援するためにわかりやすいウェブサイトを構築していること、トレーニング体制が充実していること、図書館単独ではなく学内外の関連部署や機関と連携していることである。一度に取り掛かることは難しいが、これから研究データ管理を行う研究者に対して支援をすることができるように、まずは図書館内の情報共有からすすめていきたい。